ケアって何？の巻

以前の小欄で「緩和ケアとはお節介である」という話をしました。
言うまでもなく、私たちは「緩和ケア科」の看板を掲げています。
これまたいうまでもなく、病院は「治療」を提供する場所ですし、医者は「治療」をするのが仕事です。なのに緩和「ケア」科ですって？

　東畑開人著「居るのはつらいよ」によれば、ケアとは傷つけないことであるといいます。
にもかかわらず、医者である私自身は毎日のようにひとを傷つけることばかりしています。
患者さんの体を切ったり、針で刺したり、この病院にずっと置いて欲しいと願う患者さんに向かって他の病院へ転院してくださいと言い渡したり、この病気自体は治るものではないですなどと、できれば目を逸らしたい事実を突きつけたり、そんなことばかりしています。いわば落とす係。しょせん病院はひとに痛い思いをさせる場所だと割り切らなければやっていられません。
これらがケアだなんて自分でも苦笑いです。

とはいえこれも含めてお仕事ですから言い訳をする気は起りません。
医者は厳しい話をして痛い治療をする。

　それとは対照的に、現場では主に看護スタッフが日々、忍耐強く「ケア」を実践しています。もちろん医師の指示に基づき、痛いことをしないわけではありませんが。
「傷つけないこと」とひと言で言っても、人によりタイミングにより、何に傷つくのかが全く異なるので、一筋縄ではいきません。同じような場面で、ある人は放っておいてほしいし、またある人は構ってほしいのです。

　良かれと思ってしていることに対して、うまくはまれば褒められることもあるし、逆に怒られたり恨まれたりして割に合わないことも多々あります。「そこをうまくやるのがプロだろう」というたぐいの放言に耳を貸す気はないのですが、やっぱり打率は上げていきたいと思うわけです。だれだっていっさい傷付くことなく癒されたいと思っているでしょう。だってもう既に病院にいるというところまでで十分傷ついてますから。

　病院において「緩和ケア科」はスキマ産業です。一方で「緩和ケア」自体は、それがたとえただのお節介であったにしてもどんな場所、どんな場面、どんな職種でも何かできることはあるし、みんなに必要なマインドなのだと思います。たかが/されど　ケア。難しいです。